

桃色

卒業

リボン

彼

keito

カラダというのは、どうしてこんなに窮屈なんだろうか。

私は自分の体をひどく不便なものに感じている。小さくて、いびつで、実に頼りない。本当の自分自身を、体が無理に縛りつけているみたいだ。私はその不快な感覚から解き放たれたかった。

目の前にあるこのだだっ広い空みたいに、私は自由に憧れている。

式典が終わって、教室で最後のHRが始まるのを待っていた。黒板にはたいして上手くもない文字で「卒業おめでとう」と書かれていた。いったい何の卒業だろう、と考える。一応は高校の卒業式だけれども、私にとっては集団生活のひと区切りにしか過ぎない。別れを惜しむほどの友人も、振り返るほどの思い出も、つまりは心の繋がりといえるものが、ここには存在しないのだった。私は別れを演出するクラスメイトたちの寒々しい会話なんてまるで気にしていないよ、という体で、ただ机に座って窓越しに空を眺めていた。寄せ書きを集めたり、写真を撮ったり、何かの証拠のように思い出を作ること必死になっているみんなとは違うんだよ、というスタンスをとって、片肘つきながらじっと卒業式が終わるのを待っている。春からは東京の大学に進学することが決まっていた。環境を変えることで、自由に近づくことが出来たら素敵だ。

「東京に行くんだって？」

背後から聞き慣れた声が出て、私は興味なさそうに首だけを動かした。視界には前川くんの学生服が映る。彼はいつもの柔らかい笑みを携えて、私を上から見つめているだろう。彼と目が合ってしまうないように、私は目を伏せたままだった。

「うん」

私はぶっきらぼうに答える。彼は地元の専門学校に通うらしい。

「いいなあ、俺も東京に行ってみたかった」

私の無然とした態度も、彼には通用しない。彼は私に話しかける数少ないクラスメイトのひとりで、私は大いに戸惑う。私は彼の一挙手一投足をいつも気にしてしまっていた。彼が動くたびに私は話しかけられたらどうしよう、なんて答えよう、どんな仕草がいいだろうか、そんなことを考えてしまう。話しかけられれば、まとも顔をみれないほど緊張してしまうくせに、だ。しかし彼は何しに東京へ行きたいのだろうか。

「行けば良いのに」

私は、ほんの少しの願望も込めてそう口にした。

「うん、そうだね。行けば良かった。でもこの街も好きだしさ」

悩むよね。なんてそんなことを平気で言う。この街の何がそんなに気に入っているのだろう。べたべたして、なにもないと思うのに。

「ねえ、前川くんっ」

寄せ書きをしていた女子グループが、彼を次の標的を決めたのだろう。こちらに寄ってくる。

「書いて書いてっ」

「いいよ」

ここでは書いてくれるなよ、と私は切に願う。その場に居合わせるのは居心地が悪いからだ。その思いが通じたのか、前川くんは私に背中を向けて、隣の机に広げられた数枚の寄せ書きにペンを走らせた。なんて書いているのだろうか。ちょっと気になる自分が悔しい。

「前川くん、第二ボタンちょうだい」

彼がペンを走らせている間に誰かが言った。他の子からもずるいとか、欲しいとか、同じような声があがる。うちは私服の学校だったので、卒業式でも学生服で登校してきた男子は数人しかいない。たいていはスーツだ。頓着しない奴に限っては普段着のままである。彼女たちはきっとイベントに飢えてるだけなのだ。本当に前川くんの第二ボタンが欲しい人間がこの中にいるのだろうか、と私は思った。

「一個しかないから、無理だよ」彼は言った。

「えー、誰か他の人にあげるんだ？」

「いやいや、そういう意味じゃなくて。第二ボタンは一個しかないから、みんなに言われてもあげようがないよ」

「じゃあ、全部外して混ぜっこしたら？ 前川くんだけわかるように印をつけて、それをもらった人はラッキーっていう。どう？」

面白い、とみんなが話に乗かった。遊ばれているだけなのに、人の良い前川くんはみんながしたいならと几帳面に学生服のボタンをすべて外した。教室の隅で彼だけにしかわからない印をボタンにつける。

「さあどうぞ。当たりを引いてもみんな内緒だよ」

彼の手の中にまとめて握られたボタンを、女子たちが驚喜しながらひとつずつ選び取っていく。

「……あれ、いらないかな」

残りひとつになったボタンを私に渡そうとして、前川くんは気がついたように言った。いらない、って言いたくもあったけど、口にする勇気はなかった。最後の一個は第二ボタンなんじゃないかという淡い期待もあって、私は躊躇しながらもそれを受け取った。ボタンを取るときに私の指先と彼の手のひらが、かするように触れた。

「なんか俺だけ損してる気がする」

すっかりボタンのなくなった自分の学生服を見て、前川くんは笑った。その笑顔は反則だ。私もつられて微笑んだ。このときの私は嬉しくって悲しくってぐちゃぐちゃな心境で、果たしてうまく笑えていたのかわからなかった。

「じゃあ、これあげる」と女子の一人が寄せ書きに使っていたペンを彼に手渡した。その行為は伝染して次々と女子たちは手元にあった品を彼に差し出す。私は何を差し出すか迷った。咄嗟に、いつだったか私がいつも髪を留めているリボンが彼が褒めてくれたことを思いだし、覚悟を決めた。

髪の毛を解くと、私の手には桃色のリボンが残った。母親から貰ったときはどうかなと思って

いたのだけれど、使っているうちに愛着が沸いてきて、今ではお気に入りのひとつだ。私はそのリボンを彼にあげた。

「あ、ありがとう」

前川くんは文句を言わずにすべてのプレゼントを受け取った。彼の手にはペンやら消しゴムやら、文房具ばかりが乗っかっていた。その上に、私のリボンがヘビのようにとぐろを巻いている。もちろん髪の短い前川くんには使いようのないプレゼントだ。彼もさぞ困ったことだろう。わかっている、私はこれをあげずにはいられなかった。タイミング良く先生がやってきて、HRが始まる。こうして卒業式が終わった。私の区切りも、きつとついた。

翌日、私は近所のホームセンターに向かっていた。引っ越しに使う梱包用品を買うためだ。まだコートを着ていても外は肌寒い。いつだったかテレビで見た、簡単に雑誌をビニール紐で結わけるイルカ型のフックがあれば良いな、そんなことを考えていた。

通り道にある学校にひと気はなかった。今日は部活もやっていないようだ。建物の中には警備員とか用務員のおじさんがいるかも知れないが、いまは見渡す限り完全に無人だ。人がいないのを良いことに、私は立ち止まって思い入れもほとんどないはずの校舎や校庭を隅々まで見回した。特別な思い出はないものの、平凡な記憶はいくつか残っていた。それもやがて忘れるだろう。

ふと、道路と校庭を隔てるフェンスの向こう側、植えられた桜の木々のひとつに布きれが絡まっているのを発見した。風を受けてわずかに端が揺らめいていて、私は心臓が止まりそうになった。

桃色のリボンだった。

目のまわりに一気に血液が集まり、鼻の奥がツンとしてきた。ダメだ。歯を食いしばり、何もなかったかのように我慢する。桃色のリボンは、うっかり早く咲いてしまった桜の花のように見えた。満開の季節を前に誰にも見られることなく咲いて散ってしまう、空気の読めないひとひらの花びらみたいにぶらさがっている。私の気がつかない、どこか知らない遠くに飛んでいってこれていれば良かったのに。そう思った。

私は涙をこらえてその場を立ち去る。曲がり際に恐る恐る振り返ると、リボンはまだ枝に巻きついていて、いつまでもそこに佇んでいた。

私はまっすぐに前だけを見て歩いた。記憶というは何度も反芻しないと脳に定着しないのだという。反芻しなければ思い出にはならない。早く忘れるためにも、ただ引っ越しのことだけを考えようとしていた。すると向かいから男の人が歩いてきた。足元をきょろきょろと見回して私に気付いている様子もない。見間違いようもなく、それは前川くんだった。私は無視して通り過ぎたらいいものか、何ごともなかったかのように挨拶を交わすべきか、迷った。逃げるという手もある。怒るのがこのとき一番スタンダードな方法なのだろうか。しかし素直に怒りをぶつけるといふ行為は、私には少々難易度が高い。あらゆる選択肢から私が取るべき行動を選択しなければならなかったが、その一瞬の迷いが命取りとなった。前川くんが私に気がついた。彼はとても驚いた顔をしていた。私はどんな顔をしていただろうか。

気を取り直して、先に口をひらいたのは前川くんだった。

「……やあ。どこか行くの？」

「うん。引っ越しの準備で。色々」と

「ん。そっか」

それっきりお互いに無言になる。

「じゃあね」耐えかねて私が言った。

「じゃあな」安堵したように彼が答えた。

私は何もなかったという選択肢を選んだ。逃げたと言ってもいいかもしれない。この出来事を受け止めるには私の心はか弱すぎる。いつだって最後は見ないふりしか私には出来ない。私は下を向きながら前川くんの横を通り過ぎる。ちょうどすれ違ったところで、また彼が声をかけた。

「やっぱ、ちょっと待って」

振り返って前川くんを見る。彼はすごく困った顔をしていた。

「その……リボン、なくしちゃったんだ。昨日、気がついたらなくて。探しに来ただけど…  
…やっぱりなくて」

「そう」

私はなるべく平静を装って返事をした。校庭の木に引っかかってたよ。そう言ったら、彼はどんな顔をするだろうか。

「なんか、言わなきゃいけない気がして……ごめん」

「うん。……いいよ」

彼は謝ってすっきりするのかもしれない。私はこんな風に謝られてなにか気分が変わるだろうか。「でも、絶対探すから」

「いいよ」

私は声が震えていた。お願いだからやめてください。あんなリボン、見つけれたら私が惨めになる。

「ダメだよ。だって、……俺、嬉しかったし……」

恥ずかしいのか、泣きそうなのか、俯いたままの彼のこの一言は、わたしの心を完全にノックアウトした。私は咄嗟にひつつめにしていた髪を解いて、リボンを前川くん到手渡した。

「今度はなくさないでね」

ブルーだって、グリーンのだって持っているのに、今日はよりによってベビーピンクのリボンだった。桃色もどうかと思ったが、ベビーピンクも同じくらい男子には似合わない。それでも、前川くんは受け取ったそれを、大事そうに握って、ありがとう、って言ってくれた。それで十分だった。

「じゃあ、ね」私は言う。

「……ああ、じゃあな」彼もいつもの素敵な笑顔で言った。

今度こそ別れて歩き出す。歩きながら、私はこの出来事を何度も何度も反芻しようとする。そして昨日前川くんから貰ったボタンが第二ボタンなのかどうかわからなかったことを思い出した。振り返ると、彼はずっと私のことを見ていたようだった。前川くんとの距離は私が歩いた二十メートル分くらいしか離れていない。

「ねえっ。第二ボタンの目印って何っ？」

距離をはねのけて、前川くん聞こえるように大きな声で聞いた。

「お前に渡したのが当たりだよ。渡す相手決まってるから。最初っから印なんてつけてないっ」

前川くんが私に届くように凜と響く声で答えた。

「バイバイっ」

「ばいばいっ」

私は笑って手を振った。彼も大きく手を振り返した。

私は、少しだけ空に近づいた気がした。

『お題：桃色、リボン、最悪の枝 カテゴリ：悲恋』という某三題噺サイトのお題から連想されたお話です。

.....少しでも楽しんで頂けましたでしょうか？

もともと与えられたお題が悲恋というテーマだったので、校庭でリボンを見つけたところで終わる作品でした。

今回パブーにUPするにあたってテーマを変えて、このような続きを書いてみました。

(カテゴリ的に恋愛のつもりはないのですが、元にしたテーマが悲恋だったので恋愛カテゴリにしました)

誰もが自分自身に不満を抱えていると思います。

自分一人ではその不満は解消できず、他人と心を通じ合わせることで、本当の自分を知ることが出来る。

自分を認められる嬉しさっていうのでしょうか、そういった雰囲気を書いてみたつもりです。

最後まで目を通して頂いた、すべての方に感謝をいたします。

2011/11/2 第一版

恵賭

コメントに感想など頂けると嬉しいです。